

富士紀行（15） 樹海に鍛える富士学校学生！

「富士には月見草がよく似合う」と書いたのは、太宰治である。太宰は「富嶽百景」の中で、この部分を次の如く描写している。「・・・老婆も何かしら、私に安心してゐたところがあつたのだらう、ぼんやりひとこと、「おや、月見草。」さう言つて、細い指でもつて、路傍の一箇所をゆびさした。さつと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあぎやかに消えず残った。三七七八米の富士の山と、立派に相對峙し、みぢんもゆるがず、なんと言ふのか、金剛力草とでも言ひたいくらゐ、けなげにすつくと立つてゐたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ。・・・」

文学碑が旧御坂トンネル付近にある。

さて、青木ヶ原の樹海と言へば皆さんは何を想像するだろうか。紅葉台から足下に眺めた鬱蒼たる森林の海は、関西空港の約六倍、3000ha の広さである。青木ヶ原の樹海の中を東海自然歩道が通っている。

参考 東海自然歩道

「都市の背後にある自然公園をつなぐ歩道を作ろうと、まず東京～大阪間にある多くの国立公園、国定公園、都道府県立自然公園に目を付け総延長1350Kmの東海自然歩道を作った。歩道の幅は、約1.5m。コース変更等もあり、現在では総延長1697Kmである。相模湖のほとりから道志、丹沢と巡り、常に富士山を仰ぎ見る範囲で、山中湖北岸の山道を伝い、忍野八海を経て、富士浅間神社に詣でた後、足和田山、紅葉台の稜線を展望を楽しみつつ、いつしか青木ヶ原の樹海に辿り着く。青木ヶ原の樹海の中には、数十とも100とも言われる溶岩洞穴や溶岩樹型があるが、歩道の上にも代表的な富岳風穴、鳴沢氷穴がある。」

富士学校の学生教育にとっても青木ヶ原の樹海は欠かせない存在である。昭和31年米国のレンジャー訓練を学んだ者数名が富士学校に所属、レンジャー調査課程が発足した。彼らは富士山周辺に訓練適地を探し求めた。コンパス行進に最も適する地域として青木ヶ原の樹海が選考された。三つ峠も岩場訓練適地として選定され、現在も使用させて頂いている。

爾来、富士学校特に普通科部の幹部レンジャー養成の教育におけるコンパス行進と行動訓練を、また訓練班担任の幹部・陸曹の偵察課程の教育コンパス行進で、青木ヶ原を使用させて頂いている。

レンジャー学生や偵察課程の学生のコンパス行進能力は大したものである。行程7～8Km、人跡未踏、彼方此方に苔むした溶岩石が散乱し、仰いで空を見上げても見渡す限り一点の青もなく、木洩れ日を期待する方が無理であろう。又、水が無く、前進を阻む地壁や迂回せざるを得ない崖も多く、見通し距離も精々数十mと短く、コンパス片手に直行というわけに決していかず、そういう意味においては絶好の訓練場である。このような樹海を数名のグループで、一路示された目標に向かいただひたすらに前進するのである。コンパスマンと歩測マンを逐次に交代しながら。夜間など更に大変だ。前の者の中帽（ヘルメット）の後ろに貼付された夜行テープが忽然と消えた。と思ったら崖下や穴の中から呻

き声が聞こえることも多い。片足を出しては感触を確かめつつの前進はマンボダンスに似ていることからレンジャーマンボとも言う。悪戦苦闘すること十数時間、やっと目標到着。概ね目標の百m以内には到着できる。時には大きく狂って教官を慌てさせる組もあるが・・・俗に青木ヶ原はコンパスが効かないと言われているが、決してそんなことはない。小生も陸曹偵察課程の学生の組に同行教官として参加したが、問題はなかったし、富士学校の訓練でそんな話は一切聞いたことがない。

青木ヶ原は、松本清張の「波の塔」で自殺の名所として一躍有名になり、今も自殺者が引きも切らないと言う。訓練の最中に不慮の死を遂げた死者に遭遇することも多い。携帯したスズランテープを樹海中の小道まで、引っ張って目印とし、警察に通報することとしているそうである。特に薬瓶や刃物が散乱している場合等の事件性のある場合は気を使うとか。訓練終了、帰隊したならば、お清めの塩で入室前に穢れをそそぐのも彼らの習慣である。山梨県警では毎年、秋の行楽シーズン終了後に樹海の一斉捜索をするが、例年数十体の御遺体を収容するという。浮かばれずして、樹海を彷徨える魂も多いのだろう。樹海の中に乾徳道場と言うのがあり、時折訓練の最中に差し入れを頂くこともある。道場の人の話によると、躊躇い傷を持ち、血糊に塗られ、彷徨数日を物語る異臭を発し、死ぬに死ぬ、助けを求めてくる人もいると言う。

普通科部副部長の及川輝彦1佐がレンジャー教官時代の体験談を紹介しよう。コンパスマンで先頭を歩いていた学生がコンパスから顔を上げた瞬間、青白い顔が目に飛び込んできた。かの学生、「班長、またー」と例の如く助教の悪戯だろうと思って目の前の死人になりすました班長（彼はそう思いこんでいた）の肩を叩いた。その途端、その班長の体がぐらっと倒れたのである。助教も飛んできて、彼らは死体に対面した。仏さんは、大木の根本に寄りかかり、首には一筋の縄が食い込み、策条痕が見られた。周りにワンカップ大関とスルメが散乱していたという。死出の旅出に際して、最後の宴を張ったのだろう。合掌！